

学園

平成14年5月20日発行

財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652

E-mail jerko@tw.bekkoame.ne.jp

<http://cali.lin.go.jp/japan/k33/rakudai/index.htm>

だより



巻頭のことは

校長 古好秀男

財団法人 中国四国酪農
 大学校は、昭和四十年農林
 水産省の認可を受けて依頼、
 創立三十八年を迎えてお
 りますが、その間、農林水
 産省、構成県、川上村、八
 束村、JRA、地全共、全
 国酪農ヘルパー協会、おか
 酪、蒜酪を始め、多くの関
 係者の温かい御指導、御支
 援を頂きまして今日まで優
 秀な酪農後継者を養成する
 ことが出来ましたことは、
 酪農大学校の関係者の皆様
 と共に御同慶に耐えない次
 第であります。

かえりみれば、酪農後継
 者の養成に大きな夢を抱い
 て、昭和三十六年に岡山県
 立酪農大学校を創立以来四
 年間の卒業生が八十四人、
 昭和四十年に財団法人 中
 国四国酪農大学校と改組し
 て以来の卒業生が九百二十
 九人おり総計で一、〇〇六人
 の力強い後継者を送り出し
 ました。その内、五十三%
 が酪農後継者、二十四%が

畜産関係団体に就職され卒
 業生の皆さんはそれぞれの
 地域で中堅的な指導者とし
 て素晴らしい活躍をしてお
 られます。この先どんなに
 社会が発展し世の中が変貌
 を遂げたとしても、人間の
 食生活の中に、これ程まで
 にとけ込んで来ている牛乳
 を取り入れた食品は、栄養
 豊富な良質蛋白の供給から
 しても、ゆるぎのない職業
 として生き残ると思えます。
 それが酪農なのです。御承
 知の通り、今日どんな職業
 に於いても、後継者不足は
 深刻で重要な問題です。今
 一度、国、県、市町村、関
 係団体をあげて後継者の養
 成について長期間に渡り真
 剣に取り組むことが最大の
 課題ではないでしょうか。
 中でも伸び盛りの若者が魅
 力のある興味深い仕事の選
 択できる職業研修のあり方
 が問われていると思います。
 特に研修方法に特徴のある
 財団法人中国四国酪農大学

校の研修カリキュラムを分
 析してみますと、一年生の
 時には一年間を掛けて勉強
 し、誰でも搾乳技術の習得、
 管理技術、大型トラクター
 の免許等を実践教育をとお
 して会得します。二年生に
 なってからは、全国各地の
 先進的な酪農家を対象に六
 ヶ月間の実践研修を精力的
 に実施していることです。
 この校外研修の素晴らしさ
 は、本校では体験すること
 が出来ない貴重な生の酪農
 経験や人生経験を身を持つ
 て体験し甘えのきかない状
 況のなかで知らず知らずに
 精神的に強くなっているの
 です。校外研修の内容につ
 いては酪農大学校を離れて、
 酪農家で三回に分けて研修
 することになっていきます。
 まず第一回目は四月から五
 月に掛けて一人で見知らぬ
 酪農家に出掛けてお世話に
 なり研修生として耐え忍び、
 やっと家族にも酪農にも慣
 れ親しんだ頃に期限の二カ

月間がやって来て、「やれや
 れ、研修が終わった」と思
 っても、次の二回目の酪農
 家研修が待っている。地図
 を見ながら、また人に尋
 ねながら研修先の酪農家に
 たどり着き、また最初から
 お世話になることの難しさ
 や、複雑な心境を研修生な
 りに克服して乗り越えて二
 カ月間を辛抱し、やっと慣
 れた頃に二回目の研修が終
 わり、研修最終で第三回目
 の研修先にたどり着く気持
 ちは、本当に複雑だと思
 いますが校外研修を終える頃
 には、研修を終えた喜びと
 充実感で一杯になり、校外
 研修を受けて良かったとい
 う安堵感と何事にも替えがた
 い人間形成に欠くことの出
 来ない貴重な想い出となる
 のです。今は、精神的に耐
 え忍ぶことが少ない学校教
 育、家庭教育のなかで、酪農大
 学校の先人の皆さんが英知
 を結集して創り出した、こ
 の校外実践教育の素晴らし
 さを改めて再認識するとと
 もに今後も大切に継承して
 行きたいと思っております。
 歴史は永遠に続いており
 ますが、残念ながら人生は
 長いようで非常に短い。この
 世に生を受けて以来、人生
 には予行練習はありません。
 総てが本番の、自分の歴史
 なのです。自分はまだ若い

若いと思っていると、いた
 ずらに時が過ぎるだけです。
 常に目標をしっかりと持つ
 て人生設計を樹立し実行に
 移すことが大切です。一人
 では、たいしたことは出来
 ません。両親に、家族に、
 周りの人達に感謝の気持ち
 を忘れてはなりません。か
 つて戦後の食糧不足で物の
 ない高度経済成長期はいざ
 知らず、今日では総てのも
 のが本物でないと通用しな
 い時代に成って来ています。
 近年、酪農家が急激な減少
 傾向にあることから、生乳
 の需要と供給のバランスが
 崩れ、近い将来に生乳不足
 が深刻な問題となることが
 予想されますので、今こそ
 酪農基盤整備を十分に行い
 環境立法を考慮した、地に
 足の付いた安定した酪農経
 営を目指して頂きたいと思
 っています。
 酪農大学校と致しまして
 も、優秀な後継者を養成す
 るために更なる教育施設の
 充実を図りたいと考えてお
 りますので、関係者の皆様
 方の限らない御指導、御支
 援を伏してお願ひ申し上げ
 ます。
 最後になりましたが、酪
 農大学校の関係者を始め同
 窓生の皆様方の御健勝、御
 活躍を心より御祈念申し上
 げ挨拶と致します。

教務課だより

第二十五期生 卒業証書授与式

平成十四年三月二十日、
第三十六期生二十名(別表)
が、卒業。

理事長表彰

優等賞・安倉可奈

全国農業大学校協議会表彰

安倉可奈

校長表彰

優等賞

小竹原里香・竹淵 力

長戸香奈・宮脇智子

精勤賞

有馬政志・伊藤 歩

岩田義人・鈴木加奈子

努力賞

諫山健太・時川 潤

卒業論文賞

片山咲子・杉原裕子

第三十八期生入学式

平成十四年四月四日、第
三十八期生二十八名(別表)



38 期 新 入 生

入学。

内訳は、男子学生二十二
名、女子学生六名です。後
継者が十三名です。

出身地で見ると構成県出
身者が二十三名、うち岡山
県出身者が七名となってい
ます。

池田富幸 さん

退職

二十数年の長きに渡り学
生のため、酪農大学校のた
めに御尽力下さいました池
田富幸さんが平成十四年三
月三十一日をもちまして退
職されました。どんなに天
候が悪くても年間を通し
て、第二牧場への学生の送
り迎えを休むことなく、し
かも無事故・無違反の安全
運転を続けて下さいまし
た。毎朝早くからバスの点
検を、夕方には洗車に車内
の清掃を欠かさずに実行さ
れていました。また、大学
の施設の修繕に始まり環境
整備(草刈り、溝掃除な
ど)・第一牧場当番・学生
の生活指導など多方面にわ
たり貢献されてきました。
そんな池田さんから、退
職にあたっての手紙を頂き
ましたのでご紹介します。

退職にあたり

池田 富幸



蒜山にも
春の訪れを
感じ、肌
感じる風も
心地よい、

好季節となりました。私は中
途で採用していただいて二十
三年間、長い様で短かった勤
めを無事終える事が出来まし
た事、大変嬉しく思っており
ます。私は蒜山で生まれ蒜山
を愛し、蒜山の地で勤務出来
ました事に感謝しております。
人生に一つの句切りをつ
ける事が出来た今、満ち足り
た気持ちでいっぱいです。酪
農大学校から再雇用と言う形
で残らんかと有り難いお話を
いただきましたが、何分にも
体力の衰えを感じる昨今、当
分の間は家におり、悪いとこ
ろをオーバーホール、又充電
等をしてしながら、好きな事が出
来たらいいなと思っております。
私は走る事が好きですが、
マラソン人生、今折り返した
ところと考え、マイペースで、
少しは世の役に立つ事が出来
る様な生き方をしたいと思っ
ております。今後共よろしく
お願いします。

卒業生から 在校生から

同窓会会長 筒井 一

同窓生の皆様、益々御清栄のことと、お喜び申し上げます。また、平素より同窓会活動には御理解、御協力を頂いておりますことに、感謝申し上げます。

本年は、隔年で行っております同窓会総会を開催する年となっております。七月中旬頃に開催を予定しております。そして、この春の三十六期生の卒業を持ちまして本同窓会の会員が一、〇〇〇名を越すこととなりました。このような節目の年となりましたので、盛大な総会とともに、懇親会で大いに交流を深めたいと思っておりますので、お繰り合わせのうえ多数の御出席をお待ちしております。さて、ここ数年来、乳業界や畜産業界に係わる事件

や事故が多発しております。とりわけ、この度のBSEの発生では、今まで経験したことのない打撃を受けております。特に肉牛経営の皆様にとつて死活問題となつている様で、大変お気の毒に思っております。このBSEの発生も安易な物の考え方が原因と思われる。また、牛乳による食中毒の発生も、作業のマンネリ化・手抜き・注意不足といった事が原因となつており、いわば全てが人災であると言えます。私達酪農家も、現場に於いては日々同じ作業を繰り返している中で、やはり注意不足・思い込み・マンネリ化などでミスを起こす事があります。大事には至らないまでも、「ヒヤツ」とした経験は皆様も

お持ちだと思えます。食品を生産する立場の一人として、このような事故は絶対に起こさないと気概を持って、毎日の作業を行つていきたいと思うのと同時に、一日も早い畜産環境の正常化を願っています。

同窓会から

同窓会事務局 中山

風薫る、緑したたる絶好の好季節になりました。

第一牧場も第二牧場も一斉にトウモロコシ播種の準備に取りかかつております。同窓会会員の皆様も、ご清栄にてご活躍のこととお慶び申し上げます。「忙中閑あり」と昔の人は言いました。時には蒜山三座やポプラ並木のことを思い浮かべてみてください。

本年平成十四年度は同窓会の開催年です。筒井酪農の冒頭の挨拶の中にもありましたように、平成十四年七月十五日(月)を開催予定日にし

ております。会員の多数の皆様が蒜山に来ていただき、盛大な同窓会が開催されますよう事務局も頑張りますので、よろしく願います。

仕事に就いてみて



第三十六期生
岩田 義人

私は、この春酪大を卒業した三十六期生のうちの一人です。四月から愛媛県東予市の宇佐美牧場に就職が決まり、働くことになりました。私は最初、自分のような人間が本当に仕事ができるのか、牧場の人達に迷惑がかからないだろうか、様々な不安にかられました。そんな不安の入り交じるなか、四月から宇佐美牧場に入りました。色々な心配事を考える暇も無いくらい、様々な仕事を教えてもらい毎日忙しく過ごしていきます。当然、今まで酪大では経験したことのないよう

な仕事もあり、戸惑いもあります。慣れない仕事の疲れや多くの失敗から精神的に落ち込んで、時間に遅れたりしたこともあり、更に落ち込むこともありました。しかし、そんな時こそ就職して一カ月も経っていないのに、「こんな事で落ち込んでどうする、同期の奴らも頑張ってるんだ」と自分に言い聞かせながら、頑張っています。

現在、私には一つの目標があります。酪大で取得した人工授精師の免許を生かせるように授精技術の向上に努めることです。今はまだ、未熟ですがもっと練習して牧場の繁殖成績の更なる向上に貢献できればと思っています。

そんな訳で、就職してまだ少ししか経っていませんが、今後もこの宇佐美牧場で沢山の事を学び、また酪大で学んだことを活かし、自分なりに牧場や社会に貢献していければと思っています。



一年を振り返って

第三十七期

美 崎 悦 子

この一年を振り返ってみると、本当に早い一年でした。酪大では先輩・友達・先生・牛と様々な出会いがありました。私はこの学校に来るまでは、牛に対しての免疫がほとんどありませんでした。こんなに毎日毎日、牛と一緒に過ごしたことがありませんでした。最初は牛に触ることから始めました。次に搾乳やその他のいろいろな作業を体験して自分の分担場所を終えることで精一杯でした。先輩達は、一つ一つの作業を丁寧に何回も教えてくれ、私達の要領の悪い分は先輩達が嫌な顔ひとつせず一生懸命カバーしてくれました。せっかく仲良くなっても、先輩達は二ヶ月毎に校外研修のため入れ代わるので、

寂しく思いました。それも東の間、新しく出会う先輩達も賑やかで楽しく協調性のある人達ばかりで圧倒されっぱなしでした。そして、この学校で初めて寮生活をしました。不安と期待の入り交じった複雑な気持ちでした。どの部屋も二人部屋で最初はお互いけん制していましたが、何日も一緒に暮らすうちに慣れてきて、言いたいことが言える仲^{※1}になりました。春には、自転車でお出かけしたり、夏には本館の裏山^{※2}に登って寝たり、牛舎の通路も気持ちよく、牛と一緒によく寝ました。夏休みみの当番では、暑さと疲れでメチャメチャしんどくてお互いFIGHT!と声を掛けながら頑張りました。

秋には、同窓会員の「長恒泰治」さんが毛刈り講習会の講師として来校され、その妙技にウットリ^{※3}しました。冬には毎朝が寒さとの戦いで、起きるのがとても辛く^{※4}、牛もみんな寒そうので体を寄せ合っていました。牛舎内も牛の息で白くなり、牛舎の奥が見えない時もありました。また、友達ともめたときや困ったときは、いつも先生が相談にのってくれました。食堂の「おばちゃん」^{※5}は、友達のように楽しく話してくれたり、時には厳しく、時には優しく、親元を離れている私達に対して本当の親のように接してくれました。最後に牛にも一頭一頭、個性があることを知りました。それは顔であったり、体型であったり、寝相であったり、動作一つとっても十牛十色です。まさに、私達そのもの^{※6}のようです。様々なところで生まれ、異なった環境で育った

私達が偶然か必然かは分かりませんがこうして酪大に集い、同じ目標に向かって歩んでいます。この一年間で多くの出会いがあり、一つ一つの出会いが自分を強く変えてくれる様な不思議なパワーを持っているようです。私にとって酪大で過ごした、この一年間は出会いのいっぱいありすぎたサイコーの一年でした。マジ!!楽しかったです。

※1..言わなきや良かったと思う事も、多々あるらしい。
 ※2..学生は、本館の裏の草地にある小山をこう呼んでいるようだが、実際は古墳である。確かに、よく寝れるだろう。
 ※3..カリス美容師と勘違いする学生もいたとかいないとか..
 ※4..講義の時もとても辛そうです。(談..某教員)
 ※5..学生は勿論、職員も大変お世話になっています。
 ※6..決して「学生≡牛」の事ではない。(と、思う)

職員紹介

| | |
|-------|--------|
| 校長 | 古好 秀男 |
| 副校長 | 中山 敏之◎ |
| (総務課) | |
| 課長 | 宮地 正信 |
| 主任 | 津田 清子 |
| | 有富 英美 |
| (教務課) | |
| 課長 | 副校長兼務 |
| 主任 | 橋本 尚美 |
| 主任 | 守屋 吉英○ |
| 助手 | 長綱 則之◎ |
| 調理技術員 | 講元 勝代 |
| | 西田 良子 |
| | 石原 峰子 |
| (経営課) | |
| 課長 | 田林 宏一 |
| 第一牧場長 | 経営課長兼務 |
| 技師 | 芦田 草太 |
| 助手 | 樋口 照夫 |
| 第二牧場長 | 岡田 英樹◎ |
| 技師 | 田中 健二 |
| 技師 | 溝口 泰止◎ |
| 助手 | 磯田 博 |
| 助手 | 池田 良弘 |

◎印は新職員
 ○印は内部移動

第1牧場だより



今年は例年になく春の訪れが早く、緑が美しい春本番の今日この頃ですが、卒業生の皆様にはお元気で御活躍のこととお喜び申し上げます。

平成一四年度の第一牧場の陣容は、昨年と変わりなく田林場長、芦田技師、樋口助手の三人で頑張っています。

乳用牛においては、家畜

改良及び先端技術の普及という見地から受精卵移植技術を積極的に活用するとともに、

輸入精液の

利用を行

い、牛群の

質も職員・

学生一同の

努力により

年々向上し

ており、一

日の平均出

荷乳量が一トンを越えるのも近いと思われます。

さらに、昨年四月一九日

に静岡県袋井市で開催され

た、第二六回中部日本ブラ

ックアンドホワイトショウ

に一頭出品することができ

ました。



肥育牛においては、一三年度には一九頭を出荷しましたが、BSE（牛海綿状脳症）の影響で価格が暴落し、厳しい経営となり、今後は肥育部門は縮小しジャージーF1の雄のみを肥育する予定であります。そして、その空いたスペースを利用してホルスタイン育成牛を飼養し、

初妊牛販売を

実施し、初妊牛五頭、雌子

牛二頭を販売しました。今

年も何頭かの販売を予定し

ていますので、同窓生の皆

様に是非購買して頂くよう

お願いいたします。

牧草の状況は、一三年度

は夏の天候に恵まれトウモ

飼育頭数

平成14年4月1日

| 区分 | 第一牧場 | 第二牧場 |
|------|------|------|
| 経産牛 | 42 | 79 |
| 育成子牛 | 34 | 44 |
| 乳用牛計 | 76 | 123 |
| 肥育牛 | 22 | — |
| 繁殖和牛 | 2 | — |
| 肉用牛計 | 24 | — |
| 合計 | 100 | 123 |

第2牧場はジャージー牛（単位：頭）

ロゴシの生育は順調でしたが、刈り取り時期に雨が多く刈り取りが遅れ、サイレージはバンカーサイロ一半と昨年の約八割となりました。また、牧草は九牧区を更新すると共に、尿を直接土中に散布する土中散布機を導入し増産を図っています。

最後になりましたが、今年も本校でたくましく育った若者が二〇名卒業し、一方で、夢に胸を膨らませた新入生が二八名入学してきました。



ました。卒業生の皆様には

酪農大学の近くにお寄り

の際には、本校に足を運ん

でくだされば幸いに思いま

す。

第2牧場だより

酪大第2牧場の春は、例年より一週間早く訪れ、放牧地の牧草の生育も良く、四月十八日に初放牧を行いました。当日は、テレビ局や新聞社などの報道陣が取材に訪れ、牛舎から飛び出してくるジャージー達を待ち構えていました。約五ヶ月ぶりに放牧されるジャージー達は、その報道陣を蹴散らしながら元気良く放牧場へ飛ぶように出て行きました。

さて、昨年は我が国で初めて発生が確認されたBSEの影響は大変大きく、日本の畜産業界への打撃は計りしれないものでありました。我が第二牧場もそのあおりを受け、

少なからず影響を受けました。畜産農家での副収入的存在である廃用牛とヌレ子牛価格については、ジャージーではその影響を受けやすく、収入がほとんどないどころか、運賃・手数料を除くと赤になるといった具合でした。

今回のBSEの発生により、安全・安心への消費者の関心は一層高まっています。生産者の顔が見える、また給与された飼料が確認できる畜産物の供給が求められています。第二牧場での基本方針である自給飼料の完全自給という目標は、まさに消費者の信頼を得るための第一歩として、今後努力していきたいと考

えております。

また、地球温暖化等環境への配慮が叫ばれる中で、今年度から第二牧場ではペーパーシュレツダの敷料利用を新しい取り組みとして行っております。これは、岡山県の『エコオフィス21「まきばと握手」実証事業』に取り組んでいるもので、環境に配慮し県庁からのゴミの減量化を奨めている岡山県と畜産農家が手を結び、オフィスから排出されるペーパーシュレツダーを乳牛の敷料として利用し、資源の有効利用を図ろうというものです。

現在、毎日、岡山市の県庁舎から排出されるペーパーシュレツダーが運ばれており、哺育牛や育成牛等の敷料として利用を試みているところです。

今後は、その堆肥化や牛への影響など、関係機関と協力してその成果について調査していきたいと考えております。このような取り組みが日本全国へ広がるように、調査結果を卒業生の皆様にも御報告したいと思っております。

第二牧場の平成十四年度を向かえ新体制となりました。岸戸武士前場長の後任に岡田英樹が、教務課へ移った守屋吉英主任の後任として新採用の溝口泰正君が新た

に加わりました。なお、田中健嗣・磯田博・池田良弘の三名は引き続き第二牧場の担当をしております。卒業生や関係機関の皆様、どうか近くにおいでの際はお立ち寄りの上、お声を掛けていただきますようお願いいたします。

